『津田塾大学紀要』第 53 号（2021 年）135-163 頁

ガリシア語の詩と音楽への誘い

― フィルゲイラ市長とポンテベドラ市における歌の祭典の意義 ―

浅　香　武　和

はじめに

1960 年代スペインのフランコ政権下のガリシアにおいて、中世吟遊詩人のカンティーガスから続く優美なガリシア語の詩を歌うことは可能であったのか？この時代、スペインで活躍していた作曲家はガリシア語の詩に曲をつけることは可能であったのか？

この問いに答えるために、1960 年から 1967 年においてガリシア語の詩に曲をつけるプロジェクトがすすめられた。この企画を遂行するための公立音楽学校は、当時は十分に機能していなかったが、オウレンセ市において 1958 年 9 月 28 日に壮大なプロジェクトが始まった。しかし地方語としてのガリシア語を全面的に出すには、ガリシア語の弱体性という問題が潜んでいた。そして 1965 年バチカン宗教会議は、典礼およびミサにスペインの諸言語の使用を許可した。すなわちカタルーニャではカタルーニャ語、バスクではバスク語、そしてカスティーリャではカスティーリャ語が許可された。ガリシアではガリシア語の形式的な使用は、かなり低かったことにより、使用許可は 1969 年まで待たなければならなかった。

このようなガリシアの状況のなかで、Filgueira Valverde（1906 -1996）フィルゲイラ・バルベルデはポンテベドラ市において音楽学者 Fernández-Cid（1916 -1995）フェルナンデス・シーの協力を得て、ガリシア文芸復興期レシュルディメントに活躍した詩人の抒情詩に曲をつけることを依頼した。そして、ガリシア歌の祭典を催し、スペインの気鋭の作曲家は 73 のガリシア語の詩にメロディーとアウトラインを加え楽曲を完成させた。こうしてポンテベド

ラ市主催の歌の祭典と題する文化事業はガリシア語の詩と音楽を広める嚆矢となった。小稿は、フィルゲイラ市長とポンテベドラ歌の祭典の意義について再検討するものである。

§ 1. フェルナンデス・シーの発案

ガリシアのオウレンセ出身のフェルナンデス・シーは、50年の間スペインクラシック音楽界において音楽評論家として活躍した。とくに日刊紙ABCとTVEテレビシオン・エスパニョーラの音楽評論を担当した。彼の意見は、常に作曲家を尊敬するもので希望を与え好意的な論評であったと、ガリシア州立人文学研究所のFerro Ruibalフエロ・ルイバル氏は2015年に述べている。筆者は、1975年から77年にマドリード大学コレッヒオ・マヨール「サンティアゴ・アポストル」に留学していて、音楽鑑賞サークルに属しほぼ週末は地下鉄オペラ駅近くの「テアトロ・レアル」に学生チケット（100ペセタ、日本円で80円位）で入場していた。はっきりとした記憶はないが、演奏会でフェルナンデス・シー氏を見かけたかもしれない。

ポンテベドラ音楽祭に先立つこと10年、フェルナンデス・シー氏は1950年、ガリシア語の詩12篇を選び、オウレンセ市主催のもとスペイン各地で活躍する音楽家に作曲を依頼した。そして、1951年6月15日にオウレンセ市、さらに6月22日にはマドリード市で次の12曲が初演された。ソプラノはCarmen Pérez Durías カルメン・ペレス・ドゥリーアス、ピアノはCarmen Díez カルメン・ディーエスであった。Antonio Fernández-Cid に捧げる *DOCE CANCIONES GALLEGAS*（1951）『12のガリシア歌曲』のタイトルを楽譜付きでオウレンセ市は公刊した。

『12のガリシア歌曲』の内容は次の通りである。

音楽家　Músico	作品名　Poema	詩人　Poeta
Jesús Guridi ヘスース・グリーディ （Vitoria,1886-1961）	Tódol-os días すべての日々	Ramón Cabanillas ラモーン・カバニージャス （1876-1959）
Manuel Blancafort マヌエル・ブランカフォール （La Garriga,1897-1987）	Ceiño da miña aldea わが村の空よ	Ramón Cabanillas ラモーン・カバニージャス （1876-1959）
Rafael Rodríguez Albert ラフェエル・ロドリーゲス・アルベール（Alacant,1902-1979）	Levádeme 私を連れてって	Manuel Leiras Pulpeiro マヌエル・レイラス・プルペイロ （1854-1912）

Manuel Palau マヌエル・パラウ （Valencia,1983-1967）	Chove 雨降り	Xosé Ramón e Fernández-Oxea ショセ・ラモーン・エ・フェルナンデス - オシェア（1894-1988）
José Muñoz Molleda ホセ・ムーニョス・モジェーダ （Cádiz,1905-1988）	Morreu un mozo 若者が死んだ	Vicente Risco ビセンテ・リスコ（1884-1963）
Xavier Montsalvatge シャビエー・ムンサルバッジャ （Girona,1912-2002）	Meus irmáns わが同胞たち	Ramón Cabanillas ラモーン・カバニージャス （1876-1959）
Miquel Asins Arbó ミケル・アズィンス・アルボー （Barcelona,1916-1996）	O gueiteiro ガイタ奏者	Manuel Curros Enríquez マヌエル・クーロス・エンリーケス （1851-1908）
Frederic Mompou フラダリック・ムンポウ （Barcelona,1893-1987）	Aureana do Sil シール川の砂金採りの娘	Ramón Cabanillas ラモーン・カバニージャス（1876-1959）
Jesús García Leoz ヘスース・ガルシーア・レオス （Navarra,1904-1953）	O meu corasón che mando 私の心をあなたにあげる	Rosalía de Castro ロサリーア・デ・カストロ （1837-1885）
Ataúlfo Argenta アタウールフオ・アルヘンタ （Cantabria,1913-1958	O Rei tiña unha filla 王様には娘が一人いた	Ramón Cabanillas ラモーン・カバニージャス （1876-1959）
Eduard Toldorà アドゥアル・トゥルドゥラー （Vilanova,1895-1962）	As froliñas dos toxos ハリエニシダの花	Antón Noriega Varela アントン・ノリエガ・バレラ （1869-1947）
Joaquín Rodrigo ホアキーン・ロドリーゴ （Valencia,1901-1999）	¡Un home, San Antonio! まあ、聖アントニオさま！	Rosalía de Castro ロサリーア・デ・カストロ （1837-1885）

（カタルーニャ語の人名カタカナ表記は大阪大学教授長谷川先生による。日本では慣用的に使用されているスペイン語のカタカナ表記が多いが、カタルーニャ語を尊重してカタルーニャ語のカタカナ表記にする。ガリシア語についても同様である。）

尚、この12曲は*DOCE CANCIONES GALLEGAS*. Andavira, Santiago de Compostela, 2013. 音楽CD付で出版された。ソプラノ Begoña Salgueiro ベゴーニャ・サルゲイロ、ピアノ Brais González ブライス・ゴンサレスの演奏による。

1958年には、ガリシア語による22曲が企画され、*Veintidós canciones sobre textos de poetas orensanos dedicadas a Antonio Fernández-Cid de Temes.*『アントニオ・フェルナンデス・シー・デ・テメスに捧げるオウレンセ出身の詩人のテキストに対する22の歌曲』Ediciones Conservatorio de Música de Orense; pp. 95. が刊行された。プロローグはオウセンセ出身の詩人を代表してビセンテ・リスコによって認められている。さらに、1962年に *Canciones gallegas*

dedicadas a Antonio Fernández-Cid. Barcelona: Gramófono-Odeón.34 曲所収レコード二枚, 33rpm; 30 cm が発売された。ソプラノ María Teresa Tourné, ピアノ Carmen Díez Martín。 スペイン学士院のカルボ・ソテロが献辞を寄せている。(写真はレコードジャケット Volume 1. フィルゲイラ・バルベルデ財団蔵)

ジャケットの写真はポンテベドラ県オ・イオのクルセイロ

『22 のガリシア歌曲』(1958) の内容は次の通りである。

音楽家　Músico	作品名　Poema	詩人　Poeta
Óscar Esplá オスカル・ (Alacant,1886-1976)	O maio 五月	Curros Enríquez クーロス・エンリーケス (1851-1908)
Antón García Abril アントン・ガルシーア・アブリル (Teruel,1933-)	Coita 悲しみ	Álvaro de las Casas アルバロ・デ・ラス・カサス (1901-1950)
Jesús Arámbarri ヘスース・アランバリ (Bib1ao,1902-1960)	Río 川	Eugenio Montes エウヘニオ・モンテス (1897-1982)
Alberto Blancafort アルベルト・ブランカフォール (La Bañeza,1928-2004)	Frores e bágoas 花と涙	Lamas Carvajal ラマス・カルバハル (1849-1906)
Fernando Remacha フェルナンド・レマーチャ (Tudela,1898-1984)	Nouturnio 夜想曲	José Luís Cid ホセ・ルイス・シー (?)
Vicente Asencio ビセンテ・アセンシオ (Valencia,1908-1979)	O neno preguntaba 少年は尋ねていた	Celso Emilio Ferreiro セルソ・エミリオ・フェレイロ (1913-1979)
Francisco Calés フランシスコ・カレース (Zaragoza,1886-1957)	Ribeirana リベイラの女	Eladio Rodríguez González エラディオ・ロドリーゲス・ゴンサーレス (1865-1917)
José Moreno Bascuñana ホセ・モレーノ・バスクニャーナ (Madrid,1910-1994)	Morriña 郷愁	Manuel Núñez González マヌエル・ヌニェス・ゴンサーレス (1865-1917)

Manuel Parada マヌエル・パラーダ （Salamanca,1911-1973）	Rianxeira リアンショの女	Xosé Ramón e Fernández-Oxea シヨセ・ラモン・エ・フェルナンデス - オシェア（1896-1987）
Manuel Castillo マヌエル・カスティージョ （Sevilla,1930-2005）	Canzón prá Virxe que fiaba 糸を紡ぐマリアさまへの歌	Antonio Tovar アントニオ・トバール （1921-2004）
Antonio Iglesias アントニオ・イグレシアス （Ourense,1918-2011）	Ao lonxe 彼方へ	Ramón Otero Pedrayo ラモン・オテロ・ペドラヨ （1888-1976）
Manuel Moreno Buendía マヌエル・モレーノ・ブエンディア （Murcia,1932）	A fuga フーガ	Eduardo Blanco Amor エドゥアルド・ブランコ・アモール （1897-1979）
Gerardo Gombau ヘラルド・ゴンバウ （Salamanca,1906-1972）	Cantiga da vendimia 葡萄摘みの歌	Florencio Delgado Gurriarán フロレンシオ・デルガド・グリアラーン（1903-1987）
Narcís Bonet ナルシス・ボネット （Barcelona,1933-2019）	Cala, miña seda 黙ってよ、わがシルク	Manuel Luís Acuña マヌエル・ルイス・アクーニャ （1900-1975）
Roberto Plá ロベルト・プラー （Valencia,1915-2004）	Teño que non teño 私はないものがある	Ángel Lázaro アンヘル・ラーサッロ （1900-?）
Rafael Ferrer ラファエル・ファレー （Barcelona,1911-1988）	Lúa de vrau 夏の月	Pura Vázquez プーラ・バスケス （1918-2006）
Victoriano Echevarría ビクトリアノ・エチェバリア （Palencia,1898-1965）	Cantigas ao ouvido 耳元で囁く歌	Augusto Casas アウグスト・カサス （1906-1973）
Francisco Escudero フランシスコ・エスクデロ （San Sebastián,1912-2002）	Eiquí 此処	Alberto García Ferreiro アルベルト・ガルシーア・フェレイロ（1860-1902）
José Moreno Gans ホセ・モレーノ・ガンス （A Coruña,1897-1976）	Teño o corazón perdido 私は心をなくした	Alfonso Alcaraz del Río アルフォンソ・アルカラス・デル・リオ（1922-1957）
Javier Alfonso ハビエル・アルフォンソ （Madrid,1904-1988）	Ven á eira 畑においで	Daniel Pato Movilla ダニエル・パト・モビージャ （?）
Matilde Salvador マティルデ・サルバドール （Castellón,1918-2007）	Eu en ti 私はお前の中に	Celso Emilio Ferreiro セルソ・エミリオ・フェレイロ （1913-1979）
Cristóbal Halffter クリストバル・ハルフテル （Madrid,1930 ）	Panxoliña 聖誕祭	Vicente Risco ビセンテ・リスコ （1884-1963）

（カタルーニャ人作曲家名については、Fundació Frederic Mompou 研究員内藤多寿子さんの協力による。）

この二作（『12のガリシア歌曲』1951,『22のガリシア歌曲』1958）の合計34曲は、ガリシア語によるテキストにピアノ伴奏の歌曲となり、スペインを代表する作曲家の参加により優れた作品となった。それは先駆的なコレクションとして重要性を形成し、最初のレコーディングはオウレンセ市の協賛、2回目の録音はMarquesa de Alta Graciaアルタ・グラシア侯爵夫人の後援によった。

これらの曲は、1958年に開催されたI Música en Compostela第1回コンポステーラ国際音楽講習会にも演奏され、現在に至るまで延々と歌い継がれている。コンポステーラ音楽講習会はAndrés Segoviaアンドレス・セゴビアの発案によりすすめられ、多くのの作曲家の賛同を得て、今年（2020）は63回目なる。フィルゲイラ・バルベルデも当然ことながらこの講習会に尽力し、2000年には功績を讃えて室内楽グループ “Filgueira Valverde”が結成された。

§ 2. コンポンテーラ国際音楽講習会について

正式な名称はOs Cursos Universitarios e Internacionais de “Música en Compostela”で、アンドレス・セゴビアの発案により1958年創設された。外交官ホセ・ミゲス・ルイス・モラーレス、当時のスペイン外務省文化交流局長の協力による。毎年、夏の8月にサンティアゴ・デ・コンポステーラで開催されている。開講時に掲げられた講習会の目的を62年目の2020年再確認することが謳われる予定であったが、コロナウィルスによるパンデミックのために講習会は中止となった。その目的はスペイン音楽を発信すること、演奏すること、レベルを高めることの三つである。世界の20の国々から参加している講習生は100年祭に向けて毎年この理想を持つこととしている。

「コンポステーラ音楽講習会」の開催は、スペイン音楽を世界に知らせるために大音楽家アンドレス・セゴビアが世界をめぐる演奏旅行が起点となった。スペイン芸術院のことばを借りて言えば、スペインの五線譜を「粛清すること、注意を向けること、輝きを与えること」のために、つねにスペインで生まれた多くの作曲家が作り上げた曲を高め普及することから「コンポステーラ音楽講習会」が創設された。

この講習会にはセゴビア自身も講師となり、さらに多くの著名な音楽家が講師を務めた。Óscar Esplá オスカル・エスプラー, Frederic Mompou フラダリック・ムンポウ, Joaquín Rodrigo ホアキーン・ロドリーゴ, Alicia de Larrocha アリシア・デ・ラローチャ, Xavier Monsalvatge シャビエー・ムンサルバッジャ,

Victoria de los Ángeles ビクトリア・デ・ロス・アンヘレス , Monserrat Caballé ムンサラット・カバリェー , Conchita Badía コンチータ・バディア , Gaspar Cassadó ガスパール・カサドー , Rosa Sabater. ロッサ・サバテール。 近年になり Carmelo Benaola カルメロ・ベナオラ , Cristóbal Halffter クリストバル・ハルフテル , Luís de Pablo ルイス・デ・パブロ , Antonio Iglesias アントニオ・イグレシアス , Enríque Santiago エンリーケ・サンティアーゴ , Isabel Penagos イサベル・ペナゴス , José López Calo ホセ・ロペス・カーロ , Antón García Abril アントン・ガルシーア・アブリルなどの講師陣がいる。

この講習会には、多くの日本人音楽家も受講している。(漢字名不詳はひらがな表記)

1959 年　青山三郎ピアノ、関原和子ピアノ、内田るり子声楽

内田るり子は、当時ウィーン国立音大に留学中で、コンポステーラ音楽講習会に参加した。その体験記は『ヨーロッパに歌を求めて』(音楽之友社、1964) から知ることができる。

1960 年　唐木明美声楽、小林澄子声楽、松田二朗ギター、おさわばんギター、篠原真作曲

1961 年　いざきひろ子声楽、松田二朗ギター、小原聖子ギター、小原安正ギター、大西ひろちかギター、おさわばんギター、柳貞子声楽

柳貞子のホームページの扉には、1961 年コンポステーラ音楽講習会でアンドレス・セゴビア、コンチータ・バディア、ガスパール・カサドーと並んだ写真がある。

1962 年　林田のり子ヴァイオリン、家永まさる合唱、三木けいしチェロ、宮川ただとし作曲、村田せつ子声楽、野呂たえ子声楽、佐藤ひろはる室内楽、関原和子ピアノ、多田てる子合唱、山本かおる作曲、柳原敦子ピアノ、四家文子

この年、ガスパール・カサドーとともに原智恵子 Chieko Hara de Cassadó は講習会に参加し、カサドーのチェロとピアノ演奏で友情出演を行っている。サンティアゴ大聖堂前で日本人参加者と撮った写真が Antonio Iglesias 編 : *Música en Compostela (1958- 1974)*, Vol. I. Editado por el Consorcio de la Ciudad de Santiago, 1994. に掲載されている。(資料提供はコンポステーラ音楽講習会に 13 年にわたり参加しているピアニスト濱口典子さんによる。)

§ 3. ポンテベドラ市における祭典の連続性と改革

フィルゲイラ・バルベルデは、ポンテベドラ市長在任中（1959~1967）、フェルナンデス・シーの協力のもとガリシア歌曲を広めるプロジェクトを推進した。とくにガリシア語で書かれた詩のテキストをクラシック音楽で表現し、さらに一般聴衆に社会的インパクトを与えることでガリシア語の発展に繋がると考えた。彼が望んだことは、文化は受けとる側の求めに応じて発信され、受け取る側にその表現が理解されるような方法が必要であるという考えであった。そこで、博識あるフィルゲイラ・バルベルデは、次の五項目を掲げた。

1. 作曲の提案と同様に演奏そのものに望まれる賞をコンクール形式に変えること。
2. 賞を設けた内容の音楽とテキストを前提に講演会に先立ち演奏会を実施すること。このことは、講演会・演奏会と名付けることを意味して関連性を持たせ、演奏は ilustración musical 音楽の啓蒙と呼ばれた。このフォーラムのためポンテベドラ音楽院声楽科の学生たちはイベリア半島各地を巡り講演会・演奏会を開催した。
3. 外国のクラシック音楽の楽団にガリシア語のテキストをクラシック音楽で演奏させること。それらの国々でリーダは、類似性と対照性の観点から、それら作品の質がどのようなものかを理解すること。
4. 民俗音楽のグループ grupos folcóricos の技術水準を高め、大衆音楽 música popular（歌唱と器楽演奏）の地位を築くこと。
5. 観光事業と関連して、とくに聖ベンティーニョ祭 San Bentiño の近くに歌謡祭を開催すること。そして、受賞者を発表して、翌年のフェスティバルの公募を出す応募をこと。

この五つの提言から、新聞報道によるとポンテベドラ劇場の収容力は満すことになった。
8 年間に、ガリシア語のエレガントなテキストから詩を選び出し、音楽を伴う歌曲を一般大衆に知らしめることは、音楽及び社会言語学的観点から文化を表面に躍り出すという深い目的があったと、考える。

フィルゲイラ・バルベルデ市長の音楽プロジェクトは、1960 年から 1967 年のあいだは活発に行われた。1967 年、彼は市長職を辞任して、Tercio Familiar 家族連合から国会議員選挙に立候補した。そして当選。1970 年の

Lei Villar Plasí ビジャール・プラシー法の制定に尽力し教育にガリシア語を取り込むために精力的に働いた。

§ 4. ポンテベドラ市（1960-1967）におけるガリシア歌の祭典の構成内容

祭典は作曲と演奏の公募で毎年三月と四月の間に行われていた。

作曲の部の賞

賞の名前	賞金 ペセタ	内容
モンテス賞 Montes	15,000 > 25,000（1962）	歌曲　歌とピアノ　楽譜 100 部
ブランコ・ポルト賞 Blanco Porto	15,000 > 25,000（1962）	聖歌隊の混声合唱曲
サンペドロ・フォルガール賞 Sampedro Folgar	10,000	ハーモニーを付けた民俗音楽の曲
ビクトール・メルカディージ賞 Víctor Mercadillo	10,000	ガリシア語の軽音楽の曲

演奏の部の賞

ピントス賞 Juan M. Pintos	3,000	ガイタと太鼓によるアルボラーダ、ムゥイニェイラ、行進曲の演奏
ルイス神父賞 Padre Luís	5,000	四部混声合唱
キローガ賞 Manolo Quiroga	5,000	小楽団の演奏と歌

これらのすべての賞は、ポンテベドラ県の著名な文化人の名を冠したものであり、歴史的遺産としての歌を知ること、価値ある歌を継承することは荒廃した社会を立ち上がらせる最良の手段であるとフィルゲイラは主張した。

社会言語学的な観点から見ると、出席者は Letras para cantar en las conferencias -concierto「講演会・演奏会における歌の文学」と題するエレガントなプログラムを受け取り、歌われたガリシア語の詩を自宅に持ち帰り味わうことが許されていた。出席者はアルバロ・デ・ラス・カサスの詩「悲しみ・(漁夫たち)」をアントン・ガルシーア・アブリルが作曲した歌を合唱していたことを当時の新聞は物語っている。これは第 1 回歌の祭典の意義をシンボライズし、歌を通してガリシア語を表面にアピールしたものである。
次に 8 年間のポンテベドラ文学音楽祭の内容を見てみたい。資料は Pregón

do Festival de la Canción Gallega（da autoría de Filgueira）está no *Boletín del Ayuntamiento de Pontevedra*. 1960, I; 45.「ガリシア歌の祭典開会の辞、ポンテベドラ市長フィルゲイラ・バルベルテ」『ポンテベドラ市広報』1960年。およびFundación Filgueira Valverdeフィルゲイラ・バルベルデ財団所蔵資料による。演奏された歌曲は、『12のガリシア歌曲』（1951）,『22のガリシア歌曲』（1958）を中心に、新たに作曲されたが演じられた。

1960年　第1回ガリシア歌の祭典　ポンテベドラ市
講演会・音楽会　6月6~12日
大会委員長　ビクトル・セルベラ・メルカディージョ・バルベイト

6月6日水曜日
講演1　「民俗音楽」アントニオ・フラグアス。歌　ポンテベドラ学院学生。
（歌の題名、カッコ内は採集地、最後は採集者、歌の題名はイタリック体）
Cantos de alomear o pan パンを捏ねる歌（Padrón市採集）Sampedro 463
Cantos do pan パンの歌（Finisterre）Alan Lomax
Mayo 五月（Viveiro）Filgueira V
Alalá. アララー *Canteiros e carpinteros* 石工と大工（Ulla）Sampedro 15
Regueifa. *A regueifa está na mesa*. 結婚式のパンは卓にある Sampedro 15
Muiñeira coreada. ムイニェイラ合唱 *Non te quero por bonita*. 可愛いお前は好きじゃない Sampedro 32
Canto de pandeiro. タンバリンの歌 *Barcala, barcalestiña* 木の器（Ames）Sampedro 42
Canto de berce. 子守歌 *O meniño chora moito* 少年はよく泣く（Moaña）Sampedro 69
Arada. 耕作 *Eu xunguín os meus boiciños* 私は子牛を繋いだ（Marcón）Inzenga XI, 25
Canto de arreiro. 馬具の歌 *Estreliña do luceiro* 輝く星（Tenorio）Sampedro 97
A Romería. 村祭り Romance. *Viñen eu de romería* 私は村祭りから来た（Lousame）Sampedro 272

参考書目は次のとおりである。
Casto Sanpedro y Folgar: *Cancionero musical de Galicia*. 2 Vols. 1942, Pondevedra. Introducción y notas por J. Filgueira Valverde. 1982 segunda edición.

José Inzenga: *Eco de España: colección de cantos y bailes populares*, Tomo I, Barcelona. 1874.

6月7日木曜日
講演2 「ガリシアの中世音楽」ホセ・フィルゲイラ
歌　ポンテベドラ学院学生、ソプラノ　ライムンダ・ルスキーニョス
Benedicamus Sancti Jacobi 聖ヤコブ祝福（A quodam Doctore galleciano editum）
Conductus. *Nostra phalanx* 我が群衆（C. Calixtinus. カリクスティヌス写本 S. XII）
Cantus parvulorum 少年の歌 S. XV
Cantigas de amigo. 恋の歌 Martín Codax マルティン・コダックス . S. XIII
Cantigas de Santa María. 聖母マリア頌歌 Alfonso X el sabio アルフォンソ 10 世賢王
Alegría, alegria 歓喜 3ª das festas
Quen vai contra Santa María... 聖母マリアに向かい CCXXXIII
Da que Deus... 神から（Lugo）LXXVII
Cosautes del Cancionero de Palacio 宮廷歌集から S. XV e XVI
Meu laranjedo 私のオレンジ売り
Meus ollos van pol-o mare 私の眼は海を眺める
Meu amor 私の恋
Rosa y Viña. 薔薇と葡萄畑 Cancionero de la Biblioteca Colombina. コロンブス図書館歌集 S. XV

6月8日金曜日
講演3 「ロマン主義音楽とその派生」ホセ・マリア・アルバレス・ブラスケス
ソプラノ　アナ・マリア・ボナケ、ピアノ　フロラ・ラリーニョ・ビラス
Miña terra, miña terra わが故郷（詩 Rosalía de Castro）曲 Marcial del Adalid
Dous amores 2つの恋（詩 Salvador Golpe）曲 José Baldomir
A un batido 攪乱に（詩 R.　Castro）曲 J. Baldomir
Un adiós a Mariquiña さようならマリキーニャよ（詩 Curros Enríquez）曲 J. Castro Suárez（Chané）
A nenita 少女（詩 M. Martínez González）曲 Enríque Lens Vieira
Doce sono 優しい眠り（詩 R. Castro）曲 Juan Montes Capón
Lonxe da terriña 故郷を離れて（詩 Aureliano J. Pereira）曲 J. Montes Capón

¿Qué ten o mozo? 少年には何がある（詩 R. Castro）曲 Prudencio Piñeiro
Airiños de Pontedvedra ポンデベドラのよそか風（詩 J. Fernández Tafall）曲 Alfonso Lois Sancho
Unha bágoa 一粒の涙（詩 J. F. Tafall）曲 José Iglesias Sánchez
Fror nova 新しい花（詩 Lago González）曲 J. Torres Creo

6 月 9 日土曜日
講演 4 「現代のコンサートにおけるガリシア歌曲」アントニオ・フェルナンデス・シー
ソプラノ　ドローレス・カバ、カルメン・ディーエス
Tódol-os días（詩 R. Cabanillas）曲 J. Guridi
Ceiño da miña aldea（詩 R. Cabanillas）曲 M. Blancafort
Levádeme（詩 Leira Pulpeiro）曲 Rodríguez Albert
Chove（詩 Fernández Oxea）曲 M. Palau
Morreu un mozo（詩 V. Risco）曲 J. Muñoz Molleda
Un home, San Antonio（詩 R. Castro）曲 Joaquín Rodrigo
Meus irmáns（詩 R. Cabanillas）曲 Xavier Montsalvatge
O gaiteiro（詩 C. Enríquez）曲 Asíns Arbó
Aureana do Sil（詩 R. Cabanillas）曲 F. Mompou
O meu corazón che mando（詩 R. Castro）曲 J. García Leoz
As froliñas dos toxos（詩 Noriega Varela）曲 E. Toldrá
A filla do Rey 王様の娘（詩 R. Cabanillas）曲 Ataúlfo Argenta

6 月 10 日日曜日
講演 5 「現代のコンサートにおけるガリシア歌曲」アントニオ・フェルナンデス・シー
ソプラノ　ドローレス・カバ、ピアノ　カルメン・ディーエス
O mayo（C. Enríquez）Oscar Esplá
Ribeirana（Eladio R. González）F. Calés
Frores e bágoas（Lamas Carvajal）A. Blancafort
Coita（Álvaro das Casas）A. Gracía Abril
Nouturnio（J. L. López Cid）F. Remacha
O neno preguntaba（Celso Emilio Ferreiro）V. Asencio
Eu en ti（C. Emilio Ferreiro）Matilde Salvador

Río（Eugenio Montes）Jesús Arámbarri
Morriña（Manuel Núñez González）José Moreno Bascuñana
Rianxeira（Fernández Oxea）Manuel Parada
Canzón para Virxe que fiaba（Antonio Tovar）Manuel Castillo

6 月 11 日月曜日
講演 6 「現代のコンサートにおけるガリシア歌曲」アントニオ・フェルナンデス・シー
ソプラノ　ドローレス・カバ、ピアノ　カルメン・ディーエス
Ao lonxe（R. Otero Pedrayo）Antonio Iglesias
A fuga（E. Blanco Amor）Manuel Moreno Buendía
Cantiga da vendimia（Flor. Delgado Gurriarán）Gerardo Gombau
Eiquí（Alberto Gracía Ferreiro）Francisco Escudero
Teño que non teño（Ángel Lázaro）Roberto Plá
Lúa de vrau（Pura Vázquez）Rafael Ferrer
Cantigas ao ouvido（Augusto Casas）Victoriano Echevarría
Cala, miña seda（Manuel Luís Acuña）Narciso Bonet
Teño o corazón perdido（A. Alcaraz del Río）José Moreno Gans
¡Ven á eira!（Daniel Pato Movilla）Javier Alfonso
Panxoliña（Vicente Risco）Cristóbal Halffter

6 月 12 日火曜日
表彰式
作曲の部　モンテス賞、ブランコ・ポルト賞、サンペドロ・フオルガール賞、ビクトルメルカディージョ賞　（1960.2.26 規定）
歌曲の部　ペルフェクト・フェイホー賞、ルイス神父賞、マノロ・キロガ賞（1960.3.6 規定）
審査委員
委員長　スペイン芸術院ホセ・エウヘニオ・デ・バビエラ王子閣下
理事　ヘスース・アランバリ、ビクトリアノ・エチェバリア、アントニオ・イグレシアス、アントニオ・フアンサーラス（幹事）、アントニオ・オドリオソーラ
ポンテベドラ県議会ブランコ・ポルト賞
聖誕祭のガリシア三部作「礼拝堂･栄光、私に枝をください、絹の細工師」（シ

プリアノ・トーレ・エンシソ）
音楽　ロドリーゴ・A. サンティアゴ
印刷費用　ブエノス・アイレスガリシアセンターによる 1960

1961 年は資料未見

1962 年　第 3 回ガリシア歌の祭典　ポンテベドラ市
講演・演奏　6 月 10 日～ 14 日
ガリシアの歌を擁護し広めた功績に対して、この年には 30 のガリシア歌曲のテキストが収められたファイルが、作曲家からアントニオ・フェルナンデス・シーに捧げられた。
ソプラノ　マリア・テレサ・トゥルネー、ピアノ　カルメン・ディーエス・マルティン

6 月 10 日火曜日
講演　アルバレス・ブラスケス
Soedades 寂寥感（Emilio A. Blázquez + Frederico de Freitas）I
Tecelana 機織りの女（Manuel Cuña Novas ）Julio Gómez I
Fror e bágoas（Lamas Carvajal）Alberto Blancafort
O meu corazón che mando（Rosalía de Castro）Jesús Leoz
¡Un home, San Antonio!（Rosalía de Castro）Joaquín Rodrigo
O mayo（Curros Enríquez）Asíns Arbó

6 月 11 日水曜日
San Benito de Lérez 聖ベニト祭

6 月 12 日木曜日
講演 「ラモーン・カバニージャスの作品を歌うために」ミジャーン・ゴンサレス－パルド
As edades da vida 人生の様々な時代（Álvarez Limeses）J. de Freitas Branco
Paisaxe en primaveira 春の景色（Ángel Sevillano）J. M. Franco
Recordos 追憶（Julio Camba）Rodrigo A.de Santiago
Tódol-os días（R. Cabanillas）Jesús Guridi
Ceíño da miña aldea（R. Cabanillas）Manuel Blancafort

Meus irmáns（R. Cabanillas）Xavier Montsalvatge
Aureana do Sil（R. Cabanillas）Federico Mompou
A Filla do Rei（R. Cabanillas）Ataúlfo Argenta

6 月 13 日金曜日
講演　「オウレンセの時代の詩について」バレラ・ハーコモ
Alalá de San Xoán 聖ショアンのアララー（Álvarez Limeses）Xoán Bautista Andrade+Joly Brag Santos
Este vaise... この人は行ってしまう（R. Castro）Manuel Valls
Mariñeira 水兵服（Baldomero Isorna）Sabino Ruíz Jalón
As froliñas dos toxos（Noriega Varela）Eduardo Toldrà
Morreu un mozo（Vicente Risco）Muñoz Molleda
Panxoliña（V. Risco）Cristóbal Halffter
Ao lonxe（Otero Pedrayo）Antonio Iglesias
Coita（Álvaro de las Casa）A. Gracía Abril

6 月 14 日土曜日
講演　アルバロ・クンケイロ
Estrela 星（Emilio Álvarez Blázquez）Jorge Rosado Pexinho I
Ría 入り江（Viñas Clavo）Manuel Angulo I
Pontevedra ポンテベドラ（Luís Amado Carballo）Carmelo A. Bernaola
Eu en ti（Celso Emilio Ferreiro）Matilde Salvador
O neno preguntaba（C. Emilio Ferreiro）Vicente Asencio
Río（Eugenio Montes）Jesús Arámbarri
Canzón para a Virxe que fiaba（Antonio Tovar）Manuel Castillo
¡Ven á eira!（Daniel Pato Movilla）Javier Alfonso

1963 年　第 4 回ガリシア歌の祭典　ポンテベドラ市
（この回以降、ガリシア語の歌のみ明記する。この年からイタリア歌曲、現代フランスのメロディー、ドイツリードとスペインルネサンス歌曲が演じられたが記載は略）

6月7日日曜日　ポリフォニーコンサート
中世のメロディー（マルティン･コダックス、聖母マリア賛歌、聖ヤコブ祝福）
（カリクスティヌス写本, a quodam doctore galleciano editum）
ルネサンス期の歌曲
大衆の歌
Cantigas de Pontevedra ポンテベドラの古謡　（ルイス・マリア・フェルナンデス 1876-1960）
Romance do Conde d'Arcos コンデ・アルコスのロマンセ（イグレシアス・ビラレジェ）
Romance de Doña Alda アルダ夫人のロマンセ（ルイス・マリア・フェルナンデス）
Foliada de Salnés サルネース地方のフォリアダ（ホセ・ミゲーレス 1891-1944）
Si vas a San Benitiño もし聖ベニティーニョ祭に行けば（ブランコ・ポルト）

6月8日月曜日
イタリア歌曲
子守歌　エレナ・キローガ解説
赤ちゃんは夢見る（レオス、イグレシアス・ビラレジェ）
ガリシア歌曲
A Cibdá de Santiago サンティアゴの街（エステル・ガルシーア・プリエト）
O enterro da moza 少女の埋葬（ガルシーア・プリエト）
Canzón de berce 子守歌（ガルシーア・プリエト）

6月9日火曜日
ドイツロマン主義歌曲
青少年の歌　（プーラ・バスケス解説）
ガリシア歌曲
Hai que traballar 働くべきだ（ビクトリアノ・エチェバリア）
O camiño do monte 山の道（ビクトリアノ・エチェバリア）
Panxoliña パンショリーニャ聖誕祭の歌（ビクトリアノ・エチェバリア）

6月10日水曜日
現代フランス歌曲

恋の歌（マリア・エルビラ・ラカッチ）
ガリシア歌曲　ポルトガル人作曲家三名によるフェルナンデス・シーに捧げる歌
Canción 歌（クラウディオ・カルネイロ）、*Nena, neniña* 少女、少女よ（ビクトール・マセド・ピントス）、*Pontevedra* ポンテベドラ（ルイ・コエーリョ）

6 月 11 日木曜日
スペイン現代音楽（ムンポウ、サマコイス、トルドラー、ハルフテル、レオス、トゥリーナ）
死者の歌（朗読ルス・ポソ）
ガリシア歌曲　聖ベニティーニョ祭
Un adiós a Mariquiña さらばマリキーニャよ（チャネ）、*Meus amores* わが恋（バルドミル）、*Lonxe da terriña* 故郷から遠く（モンテス）、*Mariñeiros* 船乗り（ガルシーア・アブリル）

6 月 12 日金曜日
中世ガリシア抒情詩のリサイタル（於聖ドミンゴ教会）
Cantigas de Amigo 恋の歌 : マルティン・コダックス、メエンディーニョ、ヌノ・フェルナンデス・トルネオル、アイラス・ヌーネス、パイ・ゴメス・チャリーニョ、ベルナル・デ・ボナバル、ペロ・モエゴ
Cantigas de Amor 愛の歌 : ゴメス・チャリーニョ、ベルナル・デ・ボナバル、ジョアン・デ・ロベイラ
Cantigas de burlas 風刺の歌 : ペロ・ダ・ポンテ、マルティン・ソアレス、アルフォンソ 10 世
Cancionero Marial 聖マリア頌歌 : サン・フェルナンド、アルフォンソ 10 世
Cancionero de Palacio 宮廷歌集 : 我が恋 ; 我が眼は海へ、我がオレンジ売り

6 月 13 日土曜日
グリゴリア聖歌（ポイオ教会）
ガリシア舞踏祭（プリンシパル劇場午後 11 時開演）
合唱と踊り（マリン、ポンテサンパイオ、バイオナ、ビーゴ、アルダーンのグループ）

1964年　第5回ガリシア歌の祭典　ポンテベドラ市、観光情報省後援
歌、ムイニェイラとガイタのコンクール
中世抒情詩のリサイタル（ウシーオ・ノボネイラ朗読）
歌とダンスの祭り、講演コンサート、ガリシア歌曲初演

6月12日日曜日
レレスの聖ベニティーニョ祭
歌、ガイタ、ムイニェイラ踊りのコンクール
ポンテベドラ芸術団の合唱（コンバロのフオリアーダ、マルガルティーニャ、レレスのフオリアーダ）
歌のコンクール（ビラノーバ少女合唱隊）
ムイニェイラ舞踊コンクール
古謡合唱

6月17日金曜日　午後11時
中世ガリシア・ポルトガルの抒情詩のリサイタル・朗読ウシーオ・ノボネイラ
1 Ondas do mar de Vigo. ビーゴ海の波よ Cantigas. S.XIII
2 Cantigas de Santa María. 聖母マリア頌歌 S. XIII
3 Cantiga. マシアスの古謡 S. XV（Macías）
この年の朗読に、フィルゲイラ・バルベルデ市長から詩人のウシーオ・ノボネイラに招待の旨の書簡に対して、ノボネイラはルーゴ県コウレルから受諾の電報を発信している。HÓNRAME INVITACIÓN IRE FECHA SEÑALADA. NOVONEYRA（御招待光栄です、指定の日に参ります、ノボネイラ）［電報は、フィルゲイラ・バルベルデ財団所蔵］

6月21日金曜日　午後8時　於ポンテベドラ学院講堂
講演「ロメリーア（村祭り）の歌」オテロ・ペドラーヨ。紹介はミジャーン・ゴンサレス・プラド
ガリシアの大衆歌その1. Cantigas カンティーガス（古謡）
Miña Virxen da Peneda ペネーダのわが聖母（P. Luís Fernández ルイス・フェルナンデス神父）
Nosa Señora da Guía ギーアのわが聖母（P. Luís Fernámdez）
Nosa Señora da Barca バルカのわが聖母（Sampedro 228）
Carballeira de San Xusto 聖シュストの樫の森（P. Luís Fernández）

A Palmeira ヤシの木（Sampedro 272）

6 月 22 日水曜日　午後 8 時　於ポンテベドラ学院講堂
講演「ロメリーアの歌」ホセ・フィルゲイラ・バルベルデ
ガリシアの大衆歌その 2. Cantares カンターレス（俗謡）
Canto de alumear o pan パンを捏ねる歌（Sampedro 463）
Esta primeira é das Mayas 最初は五月の女王（Afonso X）
Mayo de Viveiro ビヒベイロの五月（Sampedro 128）
Mayo de Ourense オウレンセの五月（Sampedro 129）
Santa Cruz de Mayo. 五月のサンタ・クルス Pontevedra（Sampedro 131）
Barco de Mayo. 五月のバルコ Pontevedra（Sampedro）
Mayo de Pontevedra ポンテベドラの五月（Sampedro 127）
Carballeira de San Xusto 聖シュストの樫の森（P. Luís Fernández）

6 月 23 日木曜日　午後 8 時　於ポンテベドラ学院講堂
講演　「生誕祭の歌」ホセ・マリア・アルバレス・ブラスケス
ガリシアの大衆歌
La Santa Casa 聖カーサ（Sampedro 250）
Vaya de fiesta en fiesta 祭りから祭りに行け（Sampedro 266）
Vinde, vinde, rapaciños おいでよ、少年たちよ（Sampedro 268）
Señores que viven… 生きている男たち（Melide 4）
A noitiña de nadale 聖誕祭の夜（Melide 3）
San Xosé e mais María ヨゼフとマリア（P. Luís Fernández）
Tonadas gallegas para orquesta, soprano y coro ガリシアの調べ、楽団、ソプラノ、合唱 パチェーコの作品から（Maestro Pacheco 1784-1865）
Gaitero: Alejo Aboal ガイタ奏者はアレッホ・アボアル

6 月 27 日　午後 11 時　於プリンシパル劇場
講演　アントニオ・フェルナンデス・シー
セッション I. ソプラノ　カルメン・ペレス、エルミニア・ロサンス
グルック、ヘンデル、モーツアルトの作品から

6 月 28 日　午後 11 時　於プリンシパル劇場
講演　アントニオ・フェルナンデス・シー

セッション II. ソプラノ　カルメン・ペレス、エルミニア・ロサンス
メンデルスゾーン、シューマン、ブラームスの作品から

6 月 29 日水曜日
講演 「現代ガリシアの歌」アントニオ・フェルナンデス・シー
ソプラノ　カルメン・ペレス・ドゥーリアス、ピアノ　カルメン・ディーエス
セッション III. メモリアル・コンサート
Tódol-os días, As froliñas d'os toxos, O meu corazón che mando, Río, A filla do rei.
世界初演　フェルナンデス・シーに捧げるガリシアの歌 8 曲
Villancico 聖誕祭の歌（Anónimo S. XVI）J. Carol,
Cantar da lavandeira 洗濯女の歌（Baldomero Isorna）Luís M. Millet
Sin niño 巣がない（R. Castro）Isidro Máiztegui
Tal com'as nubes 雲のようなもの（R. Castro）Ramón Barece
Bailando a muiñeira ムイニェイラを踊りながら（Pura Vázquez）J. Buenagua
As Pontes ポンテス町（Pura Vázquez）J. Buenagua
Cantigas prá festa de Lérez レレス川の祭への歌（F. Valverde）J. Buenagua

6 月 30 日　木曜日　午後 7 時 30 分　於プリンシパル劇場
パリ聖ロレン少年合唱団コンサート

7 月 1 日　金曜日　午後 11 時　於マルバール劇場
聖フエメニナの合唱と舞踊

1965 年　第 6 回ガリシア歌の祭典　ポンテドベラ市　6 月 10、12、13 日
ポンテベドラ市議会庁舎

6 月 10 日土曜日　講演　アントニオ・フェルナンデス・シー
ソプラノ　ドローレス・ペレス、ピアノ　カルメン・ディーエス、
イタリア歌曲 I.

6 月 12 日月曜日　イタリア歌曲 II.

6 月 13 日火曜日　ガリシア歌曲

I. A mi esposa- わが妻へ Balada gallega（J. Calvo Sotelo）Manuel López Varela

Dos cantos gallegos ガリシアの二つの歌（Rosalía de Castro）Roberto Caamaño

A xusticia pol-a man 自らの正義

Vamos bebendo 飲んでいる

Catro poemas galegos 四つのガリシアの歌（Lorenzo Varela）Julián Bautista

María Pita マリア・ピタ

María Balteira マリア・バルテェイラ

A Ruy Xordo ルイ・ショルドに

O Touro 牡牛座

II. A dona que eu amo わが愛する婦人（Bernal de Bonaval）A. Iglesias Vilarelle

Cuatro canciones gallegas 四つのガリシアの歌（曲 García Abril）

Cando vos oyo tocar 鐘がなるのを聞くとき（Rosalía de Castro）

Todo é silencio 全てが静粛（R. Castro）

Has de cantar, meniña gaiteira 歌ってよ、陽気な娘さん（R. Castro）

Coita: Mariñeiros 悲しみ : 船乗り（Álvaro de las Casas）

Canción da queimada 火酒の歌（Baldomero Isorna）Manuel Parada

1966 年　第 7 回ガリシア歌の祭典

6 月 12 日午後 8 時　於ポンテドベラ市議会庁舎　サロン・ノブレ　午後 8 時

講演　アントニオ・フェルナンデス・シー

ソプラノ　ドローレス・ペレス、ピアノ　ミゲール・サネッティ

Temas da fonte agachada 人里離れた泉の主題（詩 Fermín Bouza Brey フェルミン・ボウサ・ブレイ）曲 Frederico de Freitas フェデリコ・デ・フレイタス

Temas en corazón 心についての主題（F. Bouza Brey）F. de Freitas

Amiga 女友達（J.M. Álvarez Blázquez）F. de Freitas

Muiñeira ムイニェイラ踊（Luís Amado Carballo）F. de Freitas

Canta, paxariño, canta 歌ってよ、小鳥さん（Faustino Rey Romero）F. de Freitas

Cantiga do vento 風の歌（M. del Carmen Kruckemberg）F. de Freitas

As sete ondas 七つの波（Ramón Vidal）F. de Freitas

Da noite ó día 夜から朝へ（Ramón Cabanillas）F. de Freitas

Soledades 寂寥感（Emilio Álvarez Blázquez）F. de Freitas

Cantiga de tecedeira 機織りの歌（R. Cabanillas）F. de Freitas
Cantiga 歌（Álvaro de las Casas）María Teresa Prieto
Canzón da noite do afiador 研ぎ師の夜なべ歌（Augusto Casas）M. T. Prieto
Instante 一瞬（Ernesto Guerra da Cal）José María Evengelista
Desespero 絶望（E. Guerra da Cal）Vicente Asencio
Cantiga antiga 古謡（E. Guerra da Cal）Matilde Salvador
En el camino 道程（Valle Inclán）María del Carmen Santiago de Meras

1967年　第8回ガリシア歌の祭典

6月12日午後8時　於ポンテドベラ市議会庁舎　サロン・ノブレ　午後8時
講演　アントニオ・フェルナンデス・シー
　　ソプラノ　ドローレス・カバ、ピアノ　アナ・マリア・ゴロステイガ
As froliñas dos toxos ハリエニシダの花（Noriega Varela）Eduardo Toldrà
Mariñeira 水兵服（Baldomero Isorna）Sabino Ruiz Jalón
Costureira お針子さん（B. Isorna）S. R. Jalón
Nosa Señora da Barca わがバルカの聖母（García Lorca）Antonio Iglesias Vilarelle
Cantigas gallegas ガリシアの歌（Valle Inclán）Juan Pich Santasusana
Cantigas de vellas 老婆の歌（Valle Inclán）J. P. Santasusana
Ronsel galego ガリシアの石碑（Ben-Cho-Sey）
Mariñeira 水兵服（Ben-Cho-Sey）Manuel Parada
Mulleres á eira 畑の女達（Ben-Cho-Sey）M. Parada
Canto de berce 子守歌（Ben-Cho-Sey）M. Parada
O amor 恋（Ben-Cho-Sey）M. Parada
O enterro da moza 少女の埋葬（Ben-Cho-Sey M. Parada
Festa 祭り（Ben-Cho-Sey）M. Parada

プログラムの注釈
これらの歌は、それぞれの作曲家からアントニオ・フェルナンデス・シーに捧げられたものである。Mariñeira を除いて全曲初演である。「わがバルカの聖母」はポンテベドラ音楽祭の顔となるイグレシア・ビラレジェ作曲になる。トルドラー作曲「ハリエニシダの花」は、彼の没後五年を記念して歌われる。

ガリシア歌の祭典についての総括

第1回ガリシア歌の祭典は、すでに見たようにアントニオ・フェルナンデス・シーが精査した楽譜を基にした演奏であった。同時に二枚のレコードがリリースされた。注目すべきことは、ポンテベドラでソプラノ歌手ドローレス・カバの独唱、講演、さらにガリシアの民俗音楽、中世音楽、ロマン派音楽が演奏されたことであった。歌のタイトルが変更になった例が一件ある。ラモーン・カバニージャスの詩 *A Filla do Rey*（王様の娘）である。アタウールフォ・アルヘンタが1951年に作曲した時は *O Rei tiña unha filla*（王様には娘が一人いた）であった。

フェルナンデス・シーの協力は、この祭典においてかなり重要な役目を担った。彼の音楽仲間に輪を広げたことと、講演者への依頼が主であった。事実、ある作曲家は彼に捧げることに特化し、未来永劫にわたることを表明した。さらに、フェルナンデス・シーはマドリードとバルセロナの新聞につねに称賛の音楽評論を寄せていた。また、1960年にこの祭典に参加したブエノス・アイレスのガリシアセンターは特別な意義を持っている。それはCipriano Torre Enciso詩、作曲Rodrigo A. de Santiago「聖誕祭のガリシア三部作」*A capella*; Groria de tres, Dádeme as pólas, Ourives da sedaが受賞したことにより、この祭典の意義がガリシア人移民にとっても証明されたことである。

§5. ガリシア歌の祭典とレレスの聖ベニティーニョ祭について

フィルゲイラ市長は催事についてグローバルな考えを持っていた。すなわち、祭典は高度な音楽レベルで、常に6月11日のレレスの聖ベニティーニョ祭にあわせて、同時開催するように企画した。その祭典において各賞を公表し、翌年の公募を知らせた。このことは、祭典に参加できないポンテベドラの人々にある種の影響を与えることを意味している。フェルナンデス・シーは、「バングアルディア」紙 *La vanguardia* に次のような論評を寄せている。（1965.7.17）

> レレスLérezの聖ベニティーニョ祭San Benitiñoの伝統的な歌は、奇跡の聖人の祭典を祝う6月11日の祭礼を現代化したものである。もし、他の祭礼をあげても、この祭礼を凌ぐものはない。そのようにするために人々は団結した。一方では、機械化、拡声器、トランジスターラジオとマイクロフォンの使用、エキゾチックな音楽バンドの利用を禁止するスローガンを掲げた。ことばを変えて言えば、enxebre純粋なメロディー、

代表的な合唱曲、村で生まれた音楽、固有の感情を表現すること、もちろん、基本的なことばでこのスローガンを守るために尊敬の念をもって何千人もの参加者と祭典を祝うことであった。こうして「ムイニェイラス（ガリシアの舞踊）」、「パンデェイラダ（タンバリンを使う舞踊）」、「アララー（ガリシアの舞踊）」、「恋歌」、「葡萄摘みの歌」、地方の代表的な村祭りの賑わいを人々は満喫した。踊りも歌も然りである。マリンの少年隊のような即興合唱隊やガイタグループは実に素晴らしかった。美しいレレス川には何艘もの船が愛らしく穏やかに、川面に水を切って滑らかに進むのが見られた。両岸には大衆、家族連れの観客が詰め寄りポンテベドラのあらゆる社会階層の人々が親交を深めることとなった。娯楽の体験、社会秩序、音楽を奏でた祭典が理解された。

この祭典をルイバル氏は、レレス川で乗船した人々からの証言から儀式は感動的であった、と聞き及んでいる。時には着飾ってお昼の弁当を持参し、音楽の極めを尽くした村祭りを楽しんだ。市長フィルゲイラ自身も「レレス川の祭りへの歌」を作詩（*Cantiga prá festa de Lérez*）、ホセ・ブエナグアが作曲している。それはエレガントで歌の祭典の成功を祈願したものであった。ポンテベドラは大衆的な性格を持った本当の音楽により村祭りで一体化した。文化的な意味を持つ交響楽団の演奏でクラッシック音楽の歌声を聴いても、ガリシア民俗音楽は歪められることはなかった。さらに、フェルナンデス・シーのことばを借りると、コンサートの無料化は祭典の成功裡につながった。こうしてフィルゲイラ市長とフェルナンデス・シーの企画は独創的なものであったということができる。

§6. ポンテベドラ歌の祭典に見る音楽レベル

ポンデベドラ音楽の祭典以前に、1959年に開催されたバレンシア州アリカンテ県の第1回ベニドロム音楽祭を注目すべきである。授賞曲はUn telegrama, Monna Bellモンナ・ベルとJuanito Segarraフアニート・セガーラの歌唱。1960年はComunicando, Elvira Quintillá エルビラ・キンティジャーとArturo Millán アルトゥロ・ミジャーンであった。ベニドロム音楽祭とポンテベドラ音楽祭の受賞曲を比べれば一目瞭然である。ベニドロムはポップス系であり、ポンテベドラはガリシア歌曲と民俗音楽である。さらに言えば、カタルーニャ人の作曲家たちがガリシアの情景、郷土色、風習、語調の特性を

上手に引き出して曲をつけたことである。それはセンショナリズムと大衆化であった。

1960年のスペインにおける音楽の風景には、ポンデベドラ音楽祭は偽りのない2つの目的で生まれた。それは、ガリシア語であり、そしてこの言語を伝統に基づく教養ある形式で曲と結び付けることであった。したがって、この音楽祭は大衆向けの性格であり、他の音楽祭のような商業主義の音楽祭とはあえて関わりを持たないようにしたことである。この選択には限界があるが、歴史が永久性を証明することを示すと考えられた。1960年、市長フィルゲイラの選択は10年後にも同じように、教育の手段としての言語、すなわちガリシア語教育法をスペイン国会に要請しながら言語を擁護することになる。それは1970年の「ビジャール・パラシー法 Lei Villar Palasí」に繋がる。市長職のままこの祭典に臨んだフィルゲイラは、すでに1923年に Seminario de Estudos Galegos「ガリシア研究セミナー」を創設したメンバーの一人として再興者であると同時に改革者である。再びフェルナンデス・シーが *La Vanguardia* 紙に寄稿した記事から要約する。ポンテベドラ市が選んだこの音楽祭の選択はスペイン全国に発信していた大きな教訓を与えた。固有の伝統に忠実であること。すなわち伝統に集中して、穏やかに生きて、芸術を求め芸術を探すことである。こうすれば、美しい一つの目的に到達することができる、と結んでいる。

おわりに　ポンテベドラ音楽祭が意味するもの

1967年、フィルゲイラ・バルベルデが市長職を退いたとき音楽祭は消滅した。フィルゲイラは管理の誤りについて常に個人的に責任を取り、協力者全員の責任負担を軽減していた。音楽祭の必要性を協力団体の仲間に説得できなかったことにより、音楽祭は開催できないものと何度も考えざるを得なかった。すなわち、彼は孤独感のなかで立ち向かっていた。それが真実のところである。しかし、見方を変えてみると、フィルゲイラの賭けは1960年代には少数派であり、ガリシア化するためには間違っていなかった。何が必要であったのかという問いには、ガリシア語は一つの妨げとなり、伝統に根差した新たな曲を作るという学術的な方法が必要であった。

しかし、問題点は言語ではなかったように思える。すなわち、開催終了一年前の1968年3月に *Voces ceibes*（自由な歌声）がサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学内に誕生した。このグループはガリシア語のテキストを使って

演じるミニマリズムの音楽家集団であり、大学の若者集団の意識を改革させる団体であった。確かに68年の大学生に起因する本質は別のことであった。やがて問題は言語ではなく、音楽のジャンルであるかのようになった。音楽を伝える手段は、一つのことば、つまりガリシア語に問題点があったことも確かだ。

多くのマス・メディアが使用したmúsica lixeira（軽音楽）と呼ばれるものを歌の祭典のなかで、商業上のヒット曲と位置付けることはない。歌の祭典は商業戦争に隠された大きなシナリオだった。むしろ、よく考えるとポンテベドラ歌の祭典の目的は別にあった。すなわち、ヨーロッパ世界の大言語（イタリア、ドイツ、フランス）のように、コンサートにおいてガリシア語の歌曲のレパートリーを創り上げることである。ポンテベドラ歌の祭典は手続きに問題があったのか？すべての芸術家はインスピレーションと感情豊かなガリシア語の詩からガリシアの情景を人々にもたらした。出演者にはわずかな賞金ではあったが、いずれの曲も初演であった。フェスティバルでは、声楽家とピアニストにより新しい数々の曲が披露された。

その評価はどうであったか？先のプログラムで見たように、毎年決められた形式であるが、確かに市役所が各回に企画した方法は均一でないために、その進展はイレギュラーであった。しかし、60年代後半のポンテベドラ歌の祭典は際立っていた。30のセッション、スペインとポルトガル、およびラテンアメリカの優れた作曲家たちによる73の作品である。とくにポルトガルからの7名の作曲家と18の作品がエントリーされた。フレデリコ・デ・フレイタの作品は11にのぼる。この新たなる文化遺産は記念碑的存在であり、ポンテベドラのガリシア歌の祭典の有意義性を認めるものである。

新たな文化遺産は再演、普及そして連綿と続くことを望んでいる。小規模な催事は行われているが、全曲を網羅した開催はなされていないように思える。多くの楽譜は最初の録音を望んでいるが、残念なことに祭典から時間が経過して重要な楽譜が埋もれてしまったことである。例えば、Baldomirバルドミルまたは Chanéチャネの作品である。

音楽史のなかで、12世紀初頭サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂でカリクスティヌス写本の無伴奏多声音楽曲（ポリフォニー）に始まり、その後、重唱の曲が現れたことによりガリシア音楽の世界が変わる一因となったことは否めない。ガリシア歌曲は大聖堂と結びついているようにとらえたい。コンポステー大聖堂の礼拝堂の師である音楽家としての Melchor López メルチョール・ロペス（1759- 1822）の重要性を再確認すべきである。それは、

コンポステーラ大聖堂の音楽水準がヨーロッパの主要な大聖堂に匹敵す価値をもっていることである。日本では、ピアノ西川理香と指揮清水雅彦がベルデガイオ合唱団を率いて、メルチョール・ロペス『レクイエム』の初演に成功した（2017.7.29 於渋谷区文化総合センター大和田）。このレクイエムの編曲は、ホセ・ロペス - カーロ神父（1922- 2020）の校訂である。（J. López-Calo e J. Trillo: Merchor López. *Misa de Requiem*. Santiago de Compostela, 1987.）カーロ神父は、第二次世界大戦後、1949 年広島のエリザベト音楽大学に赴任して教壇に数年のあいだ立たれた。ガリシア歌の会の西川氏がレクイエムの演奏と合唱にこぎ着けたのは、カーロ神父の助力によるものである。小稿を執筆中の 5 月 10 日に神父は 98 歳の天寿を全うされました。親日家の神父に感謝申し上げたい。

さらに、ガリシアの作曲家の父と称される作曲家 Marcial del Adalid マルシアル・デル・アダリーの存在も忘れてはならない。ガリシアの人々は、「詩人ロサリーア・デ・カストロは知っているが、音楽家マルシアル・デル・アダリーは知らない」という。それは、中世の知識人が言うように、「人は存在するものを愛する」につながる精神である。

今日、ガリシア語のテキストについてクラッシック音楽を専門とする作曲家のリストを見直すとき、ガリシア作曲家協会の存在を知るとき、または演奏の世界では世界レベルのガリシアの民俗音楽グループが存在することから、ポンテベドラ歌の祭典は失敗であったとはいえない。現在活躍するガリシアの作曲家 Roxelio Groba ロシェリオ・グロバ、Juan Durán ファン・ドゥラン、音楽史家 Margarita Viso, Carlos Villanueva カルロス・ビジャヌエバ、声楽家 Laura Alonso ラウラ・アロンソ、指揮者 Maximino Zumalave マキシミノ・スマラベ、および外国の作曲家 Joám Trillo ジョアン・トリリョらはポンテベドラ歌の祭典を知っていても、現在、ガリシア交響楽団ではあまりガリシア歌曲を演奏されてないように思える。ガリシアでは音楽運動が盛んであるから、1967 年以降に作曲されたガリシア語のテキストをガリシア交響楽団は上演する必要性がある。そのことからポンテベドラ歌の祭典は無用の推進ではなかったことが理解できる。それは冒険であり、模範でもある。今日、作曲家は大聖堂とともに、または劇場とともに生きてはいないが、作曲活動は続けて、聴衆を持ち続けている。

ガリシア政府は多くの分野で展望を失い、間違った方向に進んでいるかもしれない。フィルゲイラ・バルベルデは明白なビジョンを持っていた。したがって、ガリシア人が新たに明白なビジョンを示すとき、世界はガリシア人

を快く受け入れると考える。1960年代にポンテドベラ市が行った祭典は実りあるものであった。筆者は、フィルゲイラ氏がガリシア文化長官在職の時にディアス・パルド氏の紹介で、お会いしたことがある。私がガリシア語を研究していることをつげると、温かみのある励ましの言葉をいただいた思い出がある。今日、フィルゲイラ市長を記念してポンテベドラ歌の祭典を再演すべきではないか？この問いかけに、私が主宰する「日本ガリシア歌の会」では、内外での演奏会、図書出版、音楽CDの制作に勤しみ文化活動を続けている。また、東京で二期会スペイン音楽研究会を中心に「ガリシア歌曲のリサイタル」を予定している。フィルゲイラ氏への恩返しの意味をこめて。

参考文献　（本文中あげたものを除く）

Alén, María Pilar: *Historia da música galega*. Cantos, cantigas e cánticos. Vigo, Edicións A NOSA TERRA, 1997.

Arnaiz, Alejandro: *Canción de Concerto*. Cancións sobre textos literarios galegos, Antoloxía Volume I. Vigo, Edicións Xerais, 2000.

Blancas, Ángeles e Zanetti, Miguel: *A canción galega.* Volume 5 de la Colección 'Música Clásica Galega' , A Coruña, Boa Recording, 2001.

Campos Calvo-Sotelo, Javier: *La música popular gallega en los años de la transción política* (*1975-1982*)*: Recificaciones expresivas del paradigma identitario*. Madrid. Universidad Complutense de Madrid, 2008.

Capelán, Monserrat, Luis Costa Vázquez, Javier Rarabayo Montabes, Carlos Villanueva（Editores）: *Os soños de memoria, documentación musical en galicia: Metodoloxía para o estudio*. Pontevedra, Deputación de Pontevedra, 2012.

Ferro Ruibal, Xesús: "Música de concerto para 73 poemas en galego". Fundación Filgueira Valverde, 2015.

Filgueira Valverde, Xosé: *Adral*. Sada, Ediciós do Castro, 1979.

López-Calo, José: *La música medieval en Galicia*. A Coruña, Fundación Pedro Barrié de la Mazá, 1982.

Martínez Torner, Eduardo e Bal y Gay, Jesús: *Cancioneiro gallego*. A Coruña, Fundación Pedro Barrié de la Maza, 2007.

Museo do Pobo Galego, Grupo Milladoiro（Coordinador）: *Galicia fai dovs mil anos, O feito diferencial galego*. II Música, Volume 1, Museo do Pobo Galego, Santiago de Compostela, 1998.

Santiago, Rodrigo A. De: *La música popular gallega.* La Coruña, Litografía e Imprenta Roel, 1959.

Schubarth, Dorothé e Santamatina, Antón: *Cancioneiro popular galego.* I: Oficios e labores. A Coruña, Fundación Pedro Barrié de la Maza, 1984.

___: Cancioneiro popular galego. II: Festas anuais, 1986.

___: *Cancioneiro popular galego*. III: Romances tradicionais, 1987.

___: *Cancioneiro popular galego*. IV: Romances novos, cantos narrativos, sucesos e coplas locais.

___: *Cancioneiro popular galego*. V: Cantos dialogados,1988.

___: *Cancioneiro popular galego*. VI: Coplas diversas, cantos, enumerativos e estróficos, 1993.

___: *Cancioneiro popular galego*. VII: Táboas sinópticas de melodias, melodías, rexistros, indices xerais, 1995.

Viso Soto, Margarita: *Melodías galegas de José Baldomir Rodríguez*. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega, 2018.

浅香武和編訳『ガリシアのうた』音楽 CD 付、東京、DTP 出版、2009. 4 曲所収 : *Cando vos oyo tocar*（Antón García Abril）, *O meu corason che mando*（Jesús García Leoz）, *As de cantar*（Antón García Abril）, *¡Un home, San Antonio!*（Joaquín Rodrigo）. ソプラノ芳賀美穂、ピアノ西川理香。原題は Rosalía de *Castro, Cantares gallegos.* Vigo, 1863.

浅香武和編著『ガリシア 心の歌 ラモーン・カバニージャスを歌う』音楽 CD 付、*Galiza, canzón da alma, Cantata a Ramón Cabanillas*. 東京、論創社、2013.

8 曲所収: *Ceíño da miña aldea*（Manuel Blancafort）, *O camiño longo*（Antón García Abril）, *Chove*（Manuel Blancafort）, *Tódol-os días*（Jesús Guridi）, *Meus irmáns*（Ataúlfo Argenta）, *Aureana do Sil*（Frederic Mompou）, *Foliada*（Xavier Montsalvatge）. ソプラノ芳賀美穂、ピアノ西川理香。

浅香武和編著『吟遊詩人マルティン・コダックス 7 つのカンティーガス』音楽 CD 付、*Xograr Martín Codax*. 東京、論創社、2015.

浅香武和編訳『百葉の薔薇』大阪、銀河書籍、2019. 原題は Ramón Cabanillas, *A rosa de cen follas.* Mondariz, 1927.

Asaka, Takekazu（dir.）: *A rosa de cen follas.* Toquio, Son da Arte, 2020. CD musical. Contén: 1. *Era un piniño novo*（Eduardo Rodríguez Losada）, 2. *O Rei tiña unha filla*（Ataúlfo Argenta）, 3. *Aureana do Sil*（Frederic Mompou）, 4. *Corazón-Volvoreta*（Juan Durán）, 5 .*Mayo longo* de Rosalía de Castro（Xosé Baldomir）. Soprano Miho Haga, Piano Kazumi Ogura, Violín Hiroko Tsunoda, Piano Rika Nishikawa.

（Takekazu Asaka, Correspondente da Real Academia Galega, maio do 2020 ）